



イクと母乳が出る世界に
転移した女狐スパイが

射乳の快楽に堕ちるまで



エロバトルン文庫





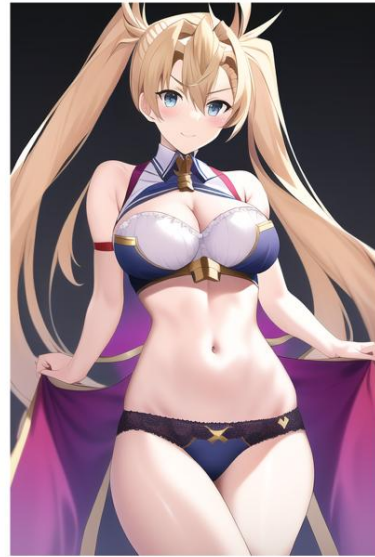
登場ヒロイン

コヤンス●ヤ

主人公を色仕掛けで
墮落させた女狐スパイ。
本気でイけずに欲求不満中
だったのだが……

ブラダマンテ

ヤリチンのアストルフォに
流され気味の少女騎士。
最近は自分からエッチに
誘い始めている。



アストルフォ

ブラダマンテと所かまわず
エッチする少年騎士。
TSして母乳が出る身体に
なっちゃう!?

プロローグ

「どうして.....こんな世界に来てしまったのでしょうか.....ああああ♥♥♥おっぱいが♥♥♥おちんぽにえぐられて.....イク! いやああああ♥♥♥ミルクが♥♥♥母乳が♥♥♥♥でちゃうううう♥♥♥♥♥乳イキするううう♥♥♥」



ぴゆる♥♥♥♥ぴゆるる♥♥♥

「ははは♥パイズリしただけでいきやがった！どんだけおちんぽ好きなんだよメスブタ！おら！もっと射乳しろ！イケ！イケ！」

ずりゆりゆ♥ぷぴゆるるる♥♥♥ずりずりずりいい♥♥

私のおっぱいをおもちやみたいに♥ああ！あああああ！またミルクでる！ちんぽが熱くて♥♥♥おっぱい犯される♥♥♥

ぴゆる♥ぴゆるるる♥♥♥ずちや♥♥♥ずりゆずりゆりゆ♥ぴゆる♥

「おっぱいパイズリイキしてますの！おちんぽには逆らえませんか！あああ♥おっぱい孕んじゃう♥♥♥ママにママになっちゃいますの♥♥♥」

「そうだよ！コヤン！ママになるんだ！おっぱい孕め！おらああ！」

「ひゃあああああん♥ちんぽおおお♥♥♥おっぱいイジメないでくださいまし♥♥♥ああああああイク♥イクイク♥♥♥おっぱいまたでちゃうううう♥♥♥おっぱい孕んでママになっちゃうのおおお♥♥♥」

びゅうううう♥びゅびゅ♥♥♥

「僕も♥ちんぽからミルク出る！おちんぽミルクで乳マンコ孕ませてやる！ああああ♥♥♥出る♥♥♥コヤンの巨乳パイズリでミルクでるうううう♥♥♥♥」

.....私は乳ブタに堕ちてしまった。

イクことで絶頂することで、おっぱいから母乳があふれでる世界で。

ブタと罵っていた男のおちんぽに負けて.....おっぱいから気持ちいいミルクをぶちまけた瞬間から.....

もう、この世界から『あなた』から.....
逃げられなくなってしまうましたの♥

1.「精液が熱い……熱くて……気持ち悪い……」
イクふりで男をだましパイズリで精液を搾り取る女狐スパイ。

「ああん♥素敵ですわあ♥マスター♥おちんぽすごい♥おおきいいん♥」

組織に潜入したスパイである私、コヤンスカヤは今日も優しく嘘をつく……

覆いかぶさったまま猿のように必死に腰をふる、この組織のかなめであるはずだった哀れな男に。

私の身体を使った籠絡であっさりこの男は堕ちてしまった。今日も情報のご褒美に股を開き男の租チンを迎え入れているのだ。

「ああ！感じてるんだね！コヤンスカヤ！ほら！もっとだ！」

調子に乗った男がさらにスピードをあげて粗チンを私のナカに潜り込ませてくる。

パンパンッと音だけは威勢よく相手に合わせるリズムもなにもない。

これではオナホにちんぽ突っ込んでいるのとなにも変わらない、独りよがりのオナニーだ。

へたくそ……

心のなかで罵りながらも優しい私は男の首に手を回すと揺れ動く巨乳にその顔を押し当てた。

男は何度か顔を振りながら胸の柔らかさを堪能してから顔を少し上げる。

荒い吐息がむきだしの乳首へとかかる。

うう……気持ち悪い……

「キレイだ……」

私の心のうちなど知らない幸せな男はそういと私の乳房に無遠慮にむしゃぶりつく。

舌が唾液が私の敏感な先っぽを刺激して少しだけ体がこわばった。

「ふふふ♥かわいいこと♥そんなに吸ってもおっぱいはでませんことよ？」

髪をゆっくりと撫でながら図体のでかい赤子をあやす。

こいつ.....ほんとおっぱいが大好きですね.....こんなに必死に吸い付きちゃって♥

「ちゅぱ♥ちゅぷ♥おっぱい♥おっぱい♥」

乳首のまわりを丹念になめながら、ぷっくりとふくれた乳輪に歯を立ててくる。

「おっぱい♥大好き♥」

本当にガキだ。おっぱい離れができない体だけ大人になったガキでしかない。

「はああん♥素敵な舌使いですわ♥感じてしまいます♥♥ふふ♥おっぱい大好きですね♥.....はあ」

ぺろぺろペロ♥ちゅぷうう♥ちゅぱちゅぱ♥



最初は母性を感じたりもしていましたが、気持ち悪い舌で私の大きなおっぱいばかり.....ぺろぺろぺろぺろとうっとおしい.....

はあ.....いい加減、乳首が痛いんでやめてもらいたいのですが.....

何度もついばまれたせいで私の愛らしい乳首が右側だけすこし伸び始めている。

クソ生意気な人間風情のせいで傾国とうたわれた私の身体が歪になるなんて！

こみ上げてくる憎悪。

忌々しげに睨むも相変わらず男は目の前の乳房に夢中で気づきもしない。幸せで愚かなブタだこと.....

ちゅぱちゅぱ♥ちゅううううう♥ちゅう♥ちゅ♥ちゅううううう♥

痛いほど右乳首を口で引っ張られる。そんなに吸い付いても母乳などでないというのに男というイキモノはいつまでもガキなのだ.....

「気持ちいい？コヤンスカヤ？」

不意に瞳をこちらに向けられた私は少し焦って、またペラペラと心にもないことを言っておまかす。

「ええ♥とっても素敵ですわあ♥マスターは舌使いも最高ですう♥私とても感じていましたの♥ほんとうにおっぱい大好きなんですね♥かわいらしいマスターさん♥」

「ほんとう！じゃあもっとしてあげるね！」

へこへこと腰が振られて再び乳首の拷問が始まる。いたい！気持ち悪い！おっぱいに夢中な男の頭を死ねとばかりに睨みつける。

ああ……もう面倒くさくなってきましたわねえ……そろそろいいでしょうか……

最初は楽しみにしていたセックスでしたけど、童貞臭の抜けきらない行為しかできない男とのセックスは苦痛でしかありません。

幸いにも終わらせる為の主導権は私が握っています。

目の前のあわれなブタもバカなプライドだけはお持ちのようで、必死に私よりも先にイクことを我慢しているようです。

ちんぽの動きがゆっくりになり、射精を我慢しているのが透けて見えます。

いい加減、楽にして差し上げるとしましょうか。

「あああ♥すごいですわあ♥イッて……もうイってしまいますわあ♥」

もちろん嘘。

ただ乱暴にちんぽを突っ込まれてるだけで私がイクはず無いでしょう？

時おり体をけいれんさせるふりをしながら、男のリズムに合わせてよがるだけの簡単なお仕事。

これで男たちは皆虜になるのだからチョロいという他ないですわね……

「イ、イクんだね！コヤンスカヤ！いいよ！僕ももうイキそう！」

叫びながら片手で私のおっぱいをまさぐってくる愚かなブタ。

早漏が……

女を満足させることもできずになにを勝手に盛り上がっているんでしょう……

「一緒に！一緒にイこう！コヤンスカヤあああああ！」

「あああん♥イク♥イク♥イきますわああああ♥マスター♥ましたああ♥♥♥」

はああん♥

私が伸び上がり体を震わせる真似をすると必死に堪えていた顔を安堵させて男は、早漏ちんぽから身勝手な精子を私の高貴な膣内にぶちまけた。

びゅびゅ♥♥♥うびゅうううううう♥びゅるるううううう♥♥♥

どんなに感じていなくとも射精されれば、マンコの中に精子は入ってくる。

それが子宮に到達できるかはわかりませんが……それでもブタの精子が、異物が……私のナカを満たすこの感触はなれないものですね……

「ああ……ほんとうに……精液が熱い♥……熱くて……気持ち悪い……」

「え？いまなんて？」

「熱くて気持ちいい♥と言ったのですわ♥もうこんなに射精して孕んでしましますわよマスター♥」

私が先にイクふりをしないと安心して射精もできないのだから、自分ではイかせあいにも勝ったとでも思っているのだろうか。

ほんとうにオトコというのは哀れなイキモノですこと……

しかもこんなに出して……なにもしなくてもマンコから精子が滴ってきてます……私のオマンコが絶品ということなのでしょうけど……

ですが、まだちんぽは満足しきってはいないようですわね……

しょうがない。大好きなおっぱいで抜くしかありませんね。

私の膣に中出ししておきながら、まだ勃起している恥知らずちんぽをおっぱいで挟み込む。

「うわあ♥♥やわらかい♥コヤンスカヤの巨乳すごいっ！」

ずりゅずりゅ……ずりゅ……

ちんぽに残った精子をローションかわりに私は男のモノをしごきあげる。

ずりゅ……ずりゅりゅ……ずりゅう……

「おっぱい♥おっぱい♥♥おっぱい！」

幼稚な言葉をあげながら、足をピンとのばした男が私のパイズリに酔いしれる。

乳首の先っぽが少しだけうずき、男の象徴を支配している優越感が胸を高鳴らせた。

「おっぱい♥おっぱい気持ちいい♥おっぱいぴゅっぴゅする！」

ずりゅずりゅ♥♥♥ずりゅりゅ♥♥じゅぼじゅぼ！ずりゅずりゅ♥♥♥♥

射精のタイミングでスパートをかけて、乳房を寄せ上げ下から上に精液を押し上げるようにちんぽを煽る。

「あ♥ああああ♥射精する♥パイズリ♥♥パイズリ射精するう！」

ドピュウウ♥ぴゅぴゅ♥♥どぴゅうううううううう♥♥♥♥



「あああん♥すごい量ですわ♥私のおっぱいそんなに気持ちよかったですねえ♥」

「うん♥すごかった♥はあコヤンスカヤも感じてくれた？」

無邪気に微笑むブタに「ええ♥」とだけ答える。

はあ……結局今日もイけずじまいでしたわ……帰ってオナニーしないと……

「気持ちよかったですね♥コヤンスカヤ！それで……あの……明日もまた来てくれるのかな」

男はすでに私の肉体の虜だった。

「ええ♥明日もまたこの時間に……」

そう微笑むと人類の存亡をかけて戦っているはずの男は、子犬のように敵であるはずの私の足に顔を擦り付けキスをする。

「ではおいとまさせていただきますわね……気持ちよかったですわよ♥マスター♥」

最後に投げキスを送ると私は彼の部屋を出たのだった。

「あら？あらあら♥」

部屋を出た廊下で私はにんまりと微笑む。

「ああん♥すごい！すごいよアーちゃん！イク！イクウウウ♥♥♥」

部屋の外ではあろうことかこの組織に召喚されたふたりのサーヴァントがセックスの真っ最中だった。

金色の長いツインテールの少女騎士と桃色の髪をみつあみに束ねた少年騎士が頭を振り乱しながら、潜入したスパイである私に構うこと無くひたすらに腰を振り快楽を貪っている。

人類史を取り戻すと息巻いていた組織の本拠地にもかかわらず、そこかしこでこのような光景はもはや珍しくもなくなっているのだ。

「イッてるんだねブラダマンテ！ほらもっともっと突いてあげる♥」

先程の私たちの行為を覗き見でもしていたのでしょうか……

彼らの仇敵であるはずの私が堂々とマスターの部屋から出てきても咎められることすらないのだから……

「もうこの組織もワタシの手中ですわねえ♥」

かつて作り上げた酒池肉林の宴の再現に満足しながら、私は帰路につくのだった。

2.「イクウウウ！ミルク出る♥ミルク出ちゃう♥♥♥」
巨乳からミルクをまき散らし絶頂する金髪の少女騎士

～次の日～

「少し遅くなってしまいましたわね」

他のお仕事に少々時間を押されながらも健気にマスターとの約束を守るために私は転移の能力を使い、男のもとへと向かう。

「ん♥……ううん？」

転移時の感覚がいつもと違うように感じる。はて？なんだったのでしょうか？ちゃんとこちらの世界には来ているようですけど……

「ともあれ急ぎますか……」

あの男は早漏のくせに待たせると不機嫌になるのだからまったく忌々しい。

私が彼の部屋の前に向かうと廊下で昨日と同じ騎士たちが既にセックスを繰り広げていた。

「あああ♥アーちゃん今日もすごいのおお♥♥♥」

まったく少しは羞恥心というものがないのでしょうか。さすがの私も呆れてその光景にため息をつく。

壁に手をつき大きなお尻と巨乳を揺らす少女騎士が体を震わせている。

マンコには太くたくましいちんぽがくわえ込まれていた……ちんぽの持ち主は意外に華奢で桃色の髪の女の子のような少年騎士。

少女騎士のツインテールを手綱のように左右の手で掴みながら彼女のマンコを荒々しく騎るように犯していた。

「あふう♥アーちゃん♥もう！もう無理だよおお♥♥」

金髪の少女騎士のほうが先に限界を迎えたようだ。

「いいよ！イクんだね！イッて！イッてブラちゃん！！」

のけぞった巨乳でツインテールの少女騎士が体を大きく震わせた。

「ああ♥ああああああああん♥イク！イクウウウウウ♥♥♥」



その瞬間、彼女の乳首から大量の母乳が宙を舞ったのだ！

ビュウウウウウ♥ビュビュウウウウウウ♥

え？ええええ！？

なんなんですのその射精したかのような母乳の量は！？

「ああ……いったねブラダマンテ……ボクも！イク！」

桃色の髪をした愛らしい少年騎士が体をピーーンと張り詰めて腰を突き出した。

ビュウ—————ビュビュウウウ—————♡

突き出した剛直と突き刺さるマンコの間からねっとりとした白い液体が溢れ出て床へとこぼれ落ちる。

「はあはあはあ気持ちいい～～～♡♡♡もっと！もっと！犯すからね！」

パンパンパンッ！

精液が垂れているにもかかわらず、かわらずの剛直ちんぽを少女騎士につきたてる少年。

「あああん♡♡♡アーちゃん♡まって♡♡♡すご！おちんぽすご！」

パンパンパアアンッ！

ちんぽが何度も少女の身体を犯し、そのたび金色のツインテールが激しく宙を舞う。

パンパンッパアアアンッ♡♡どぴゅううううう♡♡♡♡

「ああああ♡アーちゃんの熱い！ああ♡子宮に精子が！あああああああん♡♡♡♡またイク！イクウウウ！ミルク出る♡ミルク出ちゃう♡♡♡」

乳イキが射乳が止まらず快樂墮ちしていく女狐スパイ。

～数日後～

特殊な首輪をはめられ、いまだにこの世界から抜け出せないでいる……

私はイクと母乳が出る世界に転移してしまったのだ……

しかもこの世界に来てから私は能力をまるで出せない……そして今日も彼が私をイカせるために母乳を吐き出させる為にやってくる。

「助けてくださいまし……許してくださいまし……」

「やあ今日も来たよコヤンスカヤ♥いつでもおっぱい出るようになるまで頑張ろうね♥」

男はそう言うがはやいか、私のマンコにバイブを突き入れた。

いまやガバガバになった私のマンコはその先端をあっさり飲み込んでしまっている……傾国と謳われた私のマンコも無残に緩みきってしまった……

「スイッチオン！さあ美味しいミルクいっぱいだして！」

ヴヴヴヴヴヴゥ！

「ひやあああああ♥やめてええ！やめてくださいまし！もうイクの嫌！射乳したくないいい！おっぱいミルク出すの嫌ああああ！」

すぐおっぱいが熱くなり私は射乳した。おっぱいの前で待ち構えていた男の口にミルクが注ぎ込まれていく。

「んぐっんぐっ♥あああ♥今日も美味しいよ♥コヤンスカヤのおっぱい♥」

ひとしきりそれを飲み続けていた男が最後に右乳首を思い切り吸い上げる。だらりと醜く垂れ下がる長く伸びきった私の乳首……

「うううう……」

うなだれる私の顎を掴み持ち上げる男。目の前には赤ぐろい彼の極太ちんぽ……

「僕ミルクも飲ませてあげるね！愛してるよコヤンスカヤ♥」

言うが早いかちんぽが私のお口にちんぽをねじこまれる。

「はぐう♥ふぐうううう♥まひゅたあああ♥まひゅたああのミルクくらひゃいい♥」

「ははは！はしたないなあ♥所詮は獣かあ……子種欲しさに尻振るなんて浅ましいなあ」

うう……だって食事も出されず、それしか魔力の維持ができないんですもの……ああ♥ちんぽミルクうはやくうはやくう射精してええ♥

ずぼずぼ♥ずぼぼおおおおおお♥ずぶおおおおおおお♥

「おお！いいよコヤンスカヤのひよつとこフェラ！あははは！あんな美人で傲慢だった女狐スパイが、こんないやらしくて下品な顔して僕の精子搾り取ろうとしてるなんて！興奮しちゃうじゃないか♥」

「はうん♥ひゃんでもいいのほお♥はやくうはやくう♥ミルクちょうらい♥」

じゅぶじゅぶ♥じゅぼおおおおお♥じゅぼおおお♥

「いいよ！もっともっと！根本まで飲み込め！」

「うグッ！ううううう！ううううん♥ふぐうん♥」

男のちんぽがのどちんこを刺激する。私はベロでうらすじをひたすら愛撫しはやく！はやく金玉からミルクが出るのを渴望していた。

「ああ……射精しそう……生意気なメスブタの、のどマンコにぶちまけたい！ほら！もっとちんぽを気持ちよくしろよ！僕のミルクがほしいんだろ！？メスブタ！」

「ほひいい♥ほひいいれしゅう♥ミルクくらひゃい！んぐう！？」

じゅぶ！じゅぶうう！じゅぶう！じゅぶうぶ！じゅぼおおお！じゅぶぶ！じゅぶうううう！

ちんぽの出し入れが速くなる。彼の荒あらしい息が聞こえてくる。もうすぐ射精するのだ。ちんぽミルクが私に注がれるのだ。

「出る！射精する！おら！飲め！僕のちんぽミルク飲み干せ！イク！イク！」

びゅう—————♥♥♥ぶりゅう
う—————♥♥♥

喉の奥に、口に、唇に射精しながら抜き取られたちんぽがミルクを撒き散らして、私は白くそまってしまう。

「ふああああああ♥ああんう♥精子ミルクおいしい♥♥♥」

フェラチオからの解放と、今日の糧として、精液を得られた私は安堵する……ビクン！しかしすぐに身体が大きく痙攣した。

「あ！だめ！また！ああああああ♥♥♥」

彼の精子が身体に入ってきたことで私の身体が熱くほてりだした。とくにおっぱいの先っぽが……

「ううう！だめ……止まって！やっと魔力回復できるのに！ここから逃げなきゃいけないのに！ああああああ！身体があ！わたくしのお！身体がああああああ！」

びゅうううううう♥♥♥びゅびゅ♥♥♥♥

「はははは！ いっぱいでてるね♥感じてるんだコヤンスカヤ！ ほらもっとおっぱい出してよ！」

むにゅう♥♥♥むぎゅうううう♥♥♥♥

男が乱暴に私のおっぱいをつかみ、搾乳してくる！



びゅううううううううううううう♥♥♥ぶびゅうう♥♥♥♥

止められない快感から、両方の乳房から母乳が溢れ出してしまう。

「だめ！とまって！ 誰か射乳を止めてええええええええええええ！」

6.「おっぱいいい♥♥♥ミルクぜんぶううでりゅううううううう♥♥♥♥♥」美少女騎士ふたりをメス堕ちさせる種付けセックス。

「はやく！ブラダマンテ！しっかりおっぱいで僕のちんぽシゴいてよ」

「は、はい……ご主人様……」

揺れるわたしのおっぱいに熱いおちんぽを押し付けてご主人様が命令をください。

少女騎士であるわたし、ブラダマンテは、ご主人様のおちんぽには逆らえない♥

ビクンツ♥

「いやらしいおっぱいだね♥もう、イってるんだ？さっきからミルクが止まらないみたいだけど？」

おちんぽを乳首にクリクリ♥とこすり合わせながら責められる。

ぴゆるぴゆる♥あふれ出る母乳がご主人様の亀頭を白く染めるのだ。

「ご、ごめんなさい。はしたないおっぱいで……ご主人様のおちんぽが待ちきれなくてイっちゃいました……」

「ふーんそうなんだ。エッチじゃん。ブラダマンテってば、アストルフォのいやらしい爆乳見て欲情してるわけじゃないんだ？」

少しだけ視線をそらしてしまった。

「い、いえそんなことはないです……」

「ほら、アストルフォもおっぱいくっつけてよ！ふたりのおっぱいでシゴくのがいいんだろ！はやくしろよ！」

「は、はい！ごめんなさいマスター。ボクも、ボクも女の子のおっぱいでマスターのおちんぽ気持ちよくしますから！」



むにゅむにゅ♥♥♥むぎゅ♥♥♥

やわらかな白い肌のアーちゃんは、おっきなおっぱいを自分で揉みしだいてご主人様のおちんぽに押し付ける。

むにゅううう♥♥♥

そのままわたしのおっぱいにも、アーちゃんのおっぱいが密着する。

「おお！すげえ♥ダブルパイズリすげえ！ほら！ふたりともおちんぽをいやらしいおっぱいでシゴけよ！ズリズリずりずリエロ乳でご奉仕しろ！」

「「は、はい♥」」

「そうだ！いいぞ！アストルフォ♥僕の目の前で、ブラダマンテとイちゃつきやがって！射乳したくて女の子になるなんてどんだけエロいんだよ！乳イキしすぎ、おっぱい揉みすぎだろ！こんなにデカイ乳になるまでおっぱいいじりやがってエロすぎだろこのヘンタイ！」

「ごめんなさい！マスター！だってブラダマンテの乳イキが気持ちよさそうだったから……自分でいじっているうちに……」

そう、アーちゃんはわたしの乳イキ射乳をうらやましく思ったらしくて聖杯をつかって女の子になってしまった。

ちんぽが無くなったアーちゃんに欲求が抑えられなくなったわたしは、マスターのちんぽ奴隷になってしまった。

「あーダブルパイズリいい♥♥♥ぴゆるぴゆるミルク出しやがって……セルフローションじゃん。」

にゆるにゆるうん♥♥♥ずりゆ♥♥♥ずりゆうう♥♥♥



にゅむにゅむ♥♥♥にゅるうん♥♥♥ずりずり♥♥♥ちゅぽん♥♥♥

「ミルクローションの匂いエロすぎ。ほらもっとしごけよ！おちんぽ入れてほしいんだろ！僕のちんぽをメス穴に入れてほしいんだろ？しごけ！しごけよ！」

「はい！！」

サンプル版 END

続きは本編でお楽しみください。
よろしくお願いいたします。

**この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係がありません。**

18歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

**無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)
は禁止です。**

読者のみなさん、こんばんは～
ヘンタイ小説家のエロバトルンです。



作品を最後まで読んでいただき
ありがとうございました！

これからも、「凌辱」「復讐もの」「ざまあ」「敵女」
または、「男性受け」「おねショ●」「ふたなり」
などのジャンルを書いていきます。

よろしければ、フォローや
高評価、お気に入り登録で
応援していただけると
嬉しいです。

感想レビューで、好きな
ヒロインの名前やエロかった
シーンを教えてください！

twitterで情報更新中です。
こちらもフォローを
よろしくお願いします。



🔍 エロバトルン 検索

*ご注意CGのみAI生成を使用しています。